

特115

786



歌集
生半の戀と餓
上巻
詩歌集第一篇



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特115
786



朝風詩歌集第一篇

戀と餓

上卷

西出朝風著

大正
7.4.22
内交



者著の時當理整集本

影撮七・三・八一九一

私がどんな生活をして、其生活の中に何を感じ、其感じをどう歌つたかは、此集の作自身が最も明瞭に答へてくれます。

外形的な者に就ては多少言ふ事が出来ず。然しそれも大體は刊行會の趣意中に記されてをりますから申しません。

唯趣意の言葉に一二を添へますれば、私は短歌の、俳句の、純正長時の純粹を擁護します。けれども短歌なり俳句なり純正長詩なりが形に因る名稱である限り、此純粹主張と新形式の創製との別問題である事は言ふ迄ありません。極めて明瞭な事ですがともすれば

誤つて論じられますので一言します。

又現代語を用語とする私の詩歌に現代語の調子がないとか、或は俚謠風だとか言ふやうな批評を耳にした事が少くありませんが、私はこれに對し、私の足りない所に充分な反省の眼を開きながら、なほ次の二問を記したいと思ひます。「評者の現代語の調子と言ふ内容に現代日用會話の調子と言ふ意は錯つてをりますまいか。」「聯合音脚排列の約束に相違はありますが、同じ純正音律に生命を有つた純正長短詩と俚謠とが或點に於て類似の感動を誘ふのは、反つて其純

正が保たれてゐる故ではありませんまいか。」

序でに純正と言ふ言葉に就て念を入れておきます。私の言ふ日本語詩に於ける純正とは、音數、音脚、單音の三者を貫いて有形旋律を有つた者の謂ひです。

が、私はかうした外面的な理窟めいた事を言ふのを餘り好みません。それよりもつと深く深く私の内部の世界の事をおもひたい。

千九百十八年三月九日

著

者

III

北國流浪

大正四年春—同六年中。金澤市

二首、東京を流れてる日

どん底の見てはならないものを見た、
いろいろ見てはならぬもの見て。

太陽は地球らかれの惑星を、
おれはつま子をつれて流れる。

おなじ日伊東音次郎君に

東京のものあひだに音おきさんの
顔のこるもかなしいひとつ。

ほく國へ流れて歌ふ身といへば、
ふるさとながら涙ながれる。

すたしづつまた新聞の雑報に
馴れてく筆を見ればかなしい。

さい川の橋のたもとに將棋さす
車夫もふかれる、葉やなぎの風。

朝風あさかぜはいまふるさとの新聞の
記者になつたとわれをあはれむ。

あるときはふるさと加賀の新聞の
記者で死んでもいいとおもつた。

同僚につま子にけふも口きかず、
われの頭あたまにわれでもの言ふ。

をどとひも、きのふも、けふも黙黙と
人もはたらく、おれもはたらく。

晝は靴に水しみ、よるはいくたびか
燈ひの消えともりする冬がきた。

子がうまれ、そだつことなどなんにせう、
わがさびしさは日をおうて増す。

雑報はその日その日に消えてゆく、
その書きぬしのおれも消えてく。

あすもまた洋服をきてでてゆくか、
ボタンのやうにこころを閉ぢて。

ちぢむさい木綿著物をたいせつに
たたむ人ども、世を經ればなる。

このごろは軽い近視を氣にしない、
眼めとぢてもものをおもふ日おほく。

ある時は肥こはのこはにほひをなつかしむ
ほごにもさびし、人をおもへば。

ゆるせ子よ、生きて互にさしてゆく
道がちがへば打擲もする。

「こそこそと内所で雨がふつてゐる。」
女つぶやく、はつ秋の宵。

みかへれば親もつま子もあつてない、
ながいさびしい生活をした。

いつの日かこれが別れるわが子等か、
ひどりは膝のあたりにねむる。

泣くものをして泣かしめよ、泣くもの
して泣かしめよ、わが路のうへ。

秋の木をはさんでせなを寄せるとき、
つまにちる葉よ、われにちる葉よ。

つまも泣け、子も泣け、老いた親も泣け、
よわいところは眼かくして行け。

六首、うつ木女に

かくれ簀かくれ笠にも似たやうな
不思議はないか、日にかくすため。

おたがひのふたりの子等を殺しても
消しえぬ時をなんとしようか。

うへの子が一つ二つととをまでの
かずよむほどに年^{とし}経たものを。

くるやうにして来たものを、行くやうに
して行かじめよ、戀も、なさけも。

さめざめとだいて泣くとき、その泣くは
おもひつめてか、身をなげいてか。

おたがひに言つた言葉もしたことも
かならず嘘でなかつたけれど。

「ああおほきなロマンチックだ。」かういつて
わかい男の死んだ春くる。

こっさ搔き、春の山邊のこっさ搔き、
子つれ日ぐらすそのこっさ搔き。

(こっさ搔き——燃料にする枯松葉)

父なればこそ、叔父なれば、やくざもの
おれにつましくくらせとをしへる。

ある事に激して

あたらしいものは正しい、新人を
われらのなかに立てよ、兄弟。

汗ばんでうこん櫻がふくらめば
生きのびたいとつくづくおもふ。

長男が布團かぶつて寝るくせを
さびしいくせとその母はいふ。

この足をかへさうすべはないけれど、
路にわが子が泣けばかなしい。

かうもりをさすがいとしく、雨はれて
なほ洋傘をさして街ゆく。

なほさらにわがゆく路をほそうせよ、
身にふりかかるおち葉、うすれ日。

三十三の戀

大正五年夏——同六年春。金澤市

川ちかくしやく家するのをさいはひと
する、人戀うてさまよふときに。

三十を二つみつこえいとけなく
せつなく人をおもふあはれさ。

あたらしい夜あけか、ながい日のいりか、
ひと住む空そらにかかるかがやき。

そらの目の千にくだけて散る日にも、
たつた一つのことをおもはう。

戀するは戀するためか、いとせめて
かなしい歌をつくらうためか。

三十の戀はいたましぬばたまの
夜の著物を身にまとふとき。

うつむいて行くもあやしむもののない
うら町をゆく。夏の夜ながら。

その人はなにを見つけて感謝した、
ゐどころもなくものおもふ日に。

用のない編輯局へ夜おそく。
たづねて行つた。なつかしい椅子。

酒ずきな大尉参謀がよろめいて
行つたけれども、笑はなかつた。

リーダ讀むごどもに似ぬか、木の蔭に
人のたよりをくりかへすとき。

半生^{はんせい}にはじめて遇うたおごろきを
ごうおごろけばよかつたものか。

水涸れた川ごこを見て、胸の血の
きみへながれたあとにおごろく。

「……串戯じやうだんにおうけをするのでしたわねえ。」
にくくたくみな人のものいひ。

けふの日もきみをおもうて日がくれた、
きみをおもうて夜があけてから。

そのひさが人をおもうて見暮らした
水みづのもの渦か、わがしたをゆく。

ただちよつと逢うたばかりのあひびきに
つかれてかへる夏の野の汽車。

ひとめ見てよく知るくせに「おくさん」と
よんだ皮肉な避暑地の仲居。

生きる世の莊嚴きはめ、砂やまの
ねむの葉かげにあはすくちびる。

第一のあひびきの日を記憶せよ、
燃えるそらの日、光るうな原。

そのなかに心にかかるひと言の
真珠もひろふ。海をあひびき。

をさなげにふたり黙つたさびしさよ、
日かけ燃えれば、松かせふけば。

あひびきのあとの夜あけのさめがちの
皮膚の氣孔にしみるひぐらし。

なにか斯うしないでをれず、さい川の
橋のうへから河原へと飛ぶ。

一生にまたこのうへの濃いいろを
見る日があるか、深藍しんらんの海。

なにもかも知つてゐるよな鳥の眼、
鳥をまへにおもふくちびる。

どうしてか眼にはのこつた、鐵橋の
したの磧のほそい草の葉。

なつかしいものに一つのかずをます、
ちさいむし齒をつつむ黄金。

紙卷をすふ唇も、短靴に
つつんだ足もいとしいちらし。

高くあれ、きよくあれ、また寛くあれ、
そしてさびしく悲しくあれよ。

まへおきのない夜がおちた、それはやはり
二つのものか、ひとつのものか。

「搖籃」の山にふたりがいたくとき。

「ねんねおしよ」どうたふ松かせ。

暮れゆけば感きはまつてあひいだく、
秋のはじめの松おほい山。

いとせめて死なうと人の言つたとき
かすかに月があつたかとおもふ。

「あかんぼよ。」え、え、え。「ふたりはあかんぼよ、
こしてからだを揺すりませうよ。」

あひいだけばふたりとともに、松くらく
日ぐれた山の土も汗ばむ。

あるかない月のかげ這ふ原のうへ、
人のひとみを見わけうるほど。

風もなく澄んだ空からくる髪に
青い松葉のおちる秋やま。

そのひとがものつつましくいばりする
秋のほひのたかいまつ山。

永遠の草葉はかをり、蟲はとぶ。
ふたりいだいた足のあたりに。

長詩の反歌

人よ、きてわがめのまへに立ちつくせ、
君をみつめておもひ死ぬまで。

こひびとをして待たしめよ、泣かしめよ、
つぎの逢瀬のかいだきのため。

このうへにもつとおもへど、ことさらに
けふもきのふも逢ひにこぬのか。

逢はれないなげきをさらに歎けとて、
人はきのふは逢ひにきたのか。

うつむいて路ゆく癖をつけたのは
そこいらへきた秋か、でないか。

きみに似たかほにあふさへいたましく
秋ゆく街の土を見てゆく。

ゆく秋のそれでなうてもさびしいに、
わかれともない、わかれともない。

小春日の朝日にぬれて塗まくら
くくり枕にそへばいとしく。

ただひと目見たいばかりに十基米⁺の
秋の野みちをたどる短靴。

ふた柱、わかい男女の神のやう
夏よるゆく夜の山をおりたか。十き基の

十二時のよるの旅籠にきみひとり
おいてたどつた、しぐれする街。

半としはしあはせおほくすぎさつた、
山のあひびき、海のあひびき。

松かせのかかるとき吸ひ、月かげの
身にしむるときにかたくいだいた。

せにのないうつむいて
みち行くときも君をおもつた。

一生に一度のこひをするために
おもつた人をつつむ友染。

あるときの別れかなしや「このつぎは
たんとおかねを持つてきませう。」

君にあふ日のくるほかは髻そらぬ
ほごにものをばおもふ朝ゆふ。

ほく國の雪のなかゆくわが靴の
ぬれぬ日はなく、泣かぬ日はなく。

この夜よるのあとに逢へるか、あへないか、
また金澤のそらにちる雪。

戀すればかうもすなほになるものか、
小むすめのやう泣きくせがつき。

なせかうも悲しい戀をしたか、いや、
かなしい戀へさそひだしたか。

人なみにたよりなければ氣迷うて
をりもせぬかとおもふはる雨。

早春さうしゆんの日ぐれはかなし、またおなじ
ことをちかうてふたりわかれる。

ある男のなげき

大正五年初夏。金澤市

たえたかとおもふたよりを聞くことの
どんなにうれしからう。はつ夏。

ある女浪華津に泣き、あるをどこ
越路になげき夏がちかづく。

ある女旅にすむ日に、ある男
旅しをんなのふるさとに住む。

ことなつた日に世にうまれ、ことならぬ
日に世にすむをねがふおろかさ。

つまをもち、をつとをもてば子をもてば、
人はしみじみかたりえないか。

なせその日入日の赤い満洲へ
君のすがたを追ひはせなんだ。

われわれは性格をもちわれわれは
境遇をもち運命をもつた。

もつともな事だけれども、そのときは
なほさびしいときけばわびしや。

いく夏ののちの柳のしげる日に
きみはうまれた金澤をふむ。

おとたてて二度とかへらぬ水がゆく、
かへらぬ水がおとたててゆく。

きみがきてふむ日もあれば犀がはの
河原の草になつても待たう。

ある男のなげき前曲

大正四年春。東京小石川関口臺町

十餘年胸の日ぐれにほろほろと
ちるはその日のしら萩のはな。

公園のうすくらがりになだ一度
手袋ながら指をとられた。

二十圓借りたお金をかへすまの
なかつたこともかなしいひとつ。

十餘年いちづに戀うたかなしい日、
ひとりぼつちのときはなほさら。

そのはじめ酔後のやうな狂態を
つくしてふたり死ぬのだつたか。

をばりの首都生活

大正三年初秋——同四年春。東京目黒三田、同小石川關口臺町

郊外はといたばかりの細君の
帯のあひだにこほろぎがなく。

くびあげて坊がうちから往來の
土手見るやうになつた。秋ぐさ。

子の母がはな緒のしたのしろいほど
日やけをしたとはなす秋の灯。

友達も、つまさへすこし自分とは
はなれた路をあるく。あき草。

なせかうもきたないものが生きてゐる、
ものをくふ餓鬼、目つかちの餓鬼。

うつむいて行くはかなしい、あふむいて
行くはさびしい、街の秋かせ。

秋の日よ、もつとどつさり照つてくれ、
つかれてさむい、さみしからだへ。

結句このはうがのん氣と細君と
それから口をきかぬ四五日。

家出したとしま女が子をつれて
あちらこちらとあるく、あき草。

くろい眼をおほきくすゑてふどころの
わが子そと見る、朝さむの雨。

狡猾な眼をして人を見た十歳の
自分はかなし、二十年経て。

浅草へいつて、木馬にのるほどの
こころにならぬ。おれはさびしや。

浅草も、飲屋奉公して伊東
音^{おと}さんをればこころがしめる。

秋の暮、いつ本あをい木のしたを
白い牛乳配達車ゆく。

ひるまへの十時、といへば飴屋がきて
太鼓をたたく小春日の坂。

あたりまへのことだけれども、子が親にかかはりもなく、そだつはさびしい。

日のくれのそらに見いつても、のいはぬわが子の癖も時になしい。

「あの米を持つてこないが、どうしませう。」
「また十錢も買はう。」「ホホホホ。」

細君と十錢づつをだしあつて、米買ひにゆく冬、のゆふもや。

ほんのすこし、ほんのすこしのことをした
だけでことしも今くれてゆく。

血ひたすら仕事へばかりながれるを
こころよくも見、さびしくも見る。

逢ふたびにおとろへめだつ浅草の
熊にまた逢ふ大晦日の日。

あるときは家ないことがあるときは
家あることがかなしみとなる。

電線にやれ風をざり、浅草に
ゆき倒れゐた、おほみそかの日。

かうやつて歩いてゐれば時はたつ、
年はくれてく、やがて死んでく。

元日の午前の二時におく霜の
しろきをふんで米買ひにゆく。

五十銭買ってさげれば汗をかく
米やすい年もいまくれてゆく。

しづかにしづかに僕の寝どこへはいるため、
さうだ、つまとも口をきくまい。

さびしうてさびしうてさびしうてならん、
ほそい命のゆれるまにまに。

どこへ行かう、どこへいつてもおんなじだ、
どこへいつてもうちがないんだ。

「なせおれは生まれてきたか。」おれの子も
いく年ねんかへてかういふだらう。

酒のみの脳の圖に似た雲しろく
そら一面にうごく冬の夜。

北こくの親と都會の子夫婦は
多分死ぬまでたよりしなかる。

おやに似てうまれたことをおれの子も
おれとおなじに呪ふのである。

ただふつ日見ねばあはねばつまが子が
涙ぐまれるほどにいとしい。

むづかしい借きんどりの毒ぐちも
馴れてはをかし、梅のさくころ。

つまらないことのやうだが人なかへ
でてかなしいはかねのないこと。

いいちやないかなにが名譽だ、學問だ、
ごこの邊鄙で死にはてよう。

山地白雨君の一年祭に

花がちるから散るまでに變つたと
いへばかはつた、かれ等かの女等。

残した妻子へおくる消息

大正三年七月。東京芝仲門前町

三十になつて子をおきつまをおき
ゆくへもしらぬ旅へけふ立つ。

いつ逢へるわが子か、夏の朝すずに
すやすや寝ればさらになし。

では左様なら、子よ、つまよ、品川の
しゆくの夜あけのきえのこる灯よ。

霽ふかい宿場の夏のあけがたに
わかれるといへば繪のやうだけれど。

どこへゆく自分か夏のていしやばの
朝のひさしを霧がながれる。

洋傘かうりをすつぱりかぶつて寐たすがた
をかしかつたか、巡査も笑ふ。

「南豆蟲のゐないところはない。」と言ふ。
悲しいことをきくではないか。

母親が小便させる子に父の
車夫がキスする夏の路地口。

あきんごはこのあきんごも出鱈目を
まじめくさつていふがをかしい。

つまよりも子よりも金かねをかはいがる
六十三の父がいちらし。

わすれでもつま子をおいて旅するな、
わかものなればなほさらのこと。

犬にさへすなほにつかへられはせぬ
まま子はかなし。旅でなくとも。

ふとそらをあふいでさへもともすれば
涙ぐまれる。旅びとの身は。

あるときは乳屋の椅子に身をなげて
つま子をしのぶたび人を見た。

この旅はすこし意外にけふをはる、
さらにかなしいたびだちのため。

うき世

大正三年五、六月。東京北品川

こめかみをびすどるでうつことをまた
おもつてみても胸もさわがぬ。

としわかひの女郎が青い薬草を
軒の日かげにつるすはつ夏。

姑がなくなると急におかみさん
らしくなつたといふも人の世。

いくたびか自分をもせめてみましたか
やはりあなたをのろひます父うへ。

この氣質^{きしつ}あの經^へきたりをおもふとき、
やはりあなたをのろひます父うへ。

氣がつくとまたいつのまにか沈黙の
家をぬけでであるいてをつた。

ことさらに生きるいはれをかんがへて
生きてゐるのも厭^{いと}きるぢやないか。

指やれば夢のなかにも指にぎる。
わが子可愛いや、わけはなけれど。

はんけちをいぢくりながらひとりねる
子もさびしかる、親もさびしい。

半身を宙にのばしてをかしげに
めめず餌さがす夏の日はきた。

このおや子と、しづかに赤くたれた灯を
つつみうき世の夜よあけるな。

死んだ白雨君に

大正三年六月。東京北品川

「ああおほきなロマンチックだ。」かう言つて
笑つて死んだ。笑へばいいのか。

みつ日たち鮪のやうなにほひして
くさつたことなどはなんでもなければ。

棺を見てきみの鮮あざはなにいれる。
箱かときいた、不思議はなければ。

息あつて、君がのこした扶助料の
詮議をするもみちめぢやないか。

いとしがつたつまの手紙に顔をうめ
きみはすなほに釘をうたれた。

いきたえたその刹那からいそがしく
土へ土へとかはるかなしさ。

君のつまは君が死んでもめしを食ふ、
いふまでもないことだけれども。

世のながむしやうにあぢきなくなつた。
わけてもきみの死んだころから。

四ぐわつなかば花が葉になる東京で
死んだといへば、それだけのこと。

豫期しない大雄辯をきいたのは
きみ口きかすなつたそのとき。

續 餘 情

大正三年春。東京北品川

「ねえ、あなたが首しめ臺へあがるとき
あたしも一しよに」とはほるんだものを。

こんなにも悲しいならば末とげて
なせ一生ををはらなかつた。

いちらしや、ある山からの手紙には
俳句のやうなものが書きそへてある。

「旅へでてはいつも亭主にすてられる。」
こんな言葉もあるではないか。

ある時は實家へかへつてまにら麻を
ほそぼそつないでゐたこともある。

わすれてはしまはなからうと思ふけれど、
それにしてからが五六年たつた。

そのときになんておもはう、おたがひに
ゆくへもしらず死んでゆかうぞ。

わかれては悲しいをんな、ひとつ家に
住んではにくみにくんだ女。

集歌 半生の戀と餓巻上終

跋

昨大正六年初秋、金澤市で開かれた其抒情小品畫展覽會閉會後北
加賀の山深い湯涌の温泉に滞在中の夢二氏に、展覽會を記念す可
く本篇收容「北國流浪」「三十の戀」中の短歌二十餘首を布地に
書寫して郵送した。「山より」はそれに對する感想だ。今許諾を
得て此篇の跋とする。(朝風)

山より 竹久夢二

朝風兄へおくる手紙。

山の方へ来てからもう二週間になりました。その間に外へ出られる日は、ほんの数へるほどで、たいてい雨が降つて居ります。宮川君の「やさしい雨」が日本の古い繪卷の中にあるやうな傳説の線うへに降りそゞいでゐます。私の好きな土藏の白壁も、こゝでは灰色に見えがちです。長い間都會に住みなれた私には、こんな山の中で極少數の人たちとかうして太陽を迎へ月を見ることも珍らしくやさしい經驗です。山の方へ来てからは、あなたへの「ある時のある女」

の三枚續を畫いたきりで製作らしい製作もしません。けれど毎日はそのんなに退屈ではなく、中央で盛んに活動してゐる他の友人たちに比べて損をしてゐるごも思ひません。どうしたわけでしょう。都會で慌しく生活してゐるある折々の方が却つて退屈で堪へられないことを知ります。しかし、山の中で「無爲にして化す」所へはとてゆききれない私です。それもあなたはよく知つてくれたと思ひます。あなたが送つてくれた「歌稿」はその間にも私にいろんなことを考へさせました。添へた手紙に批評せよとあつたけれど、私にはとて

も批評は出来ないことを知つてゐます。何故なら、人々には各々その人自身の生活のしかたがある筈で、その人の必然な生活に第三者がどう是非を言はうやうもないからです。そしてあなたの歌は、まことあなたの現在の生活そのものだから、あなたの生活のしかたの好悪を言つて見たところでどうなるのでもない。よし私があなた同様な事實を経験したとしても、あなたの感じ方、考へ方はつひにあなたのものだ。

けれど人間には、なんでもない日常の交友の間から、また不用意

な言葉のうちに實に好いものを感じる。それはある人の精神の中から自分のある好いものを見出すからだ。

あなたの歌の中から好い者を感じた幸福を書いて批評にかへたい。

唯一目見たいばかりに十基米の

秋の野道をたどる短靴。

小春日の朝日にぬれて塗枕

くくり枕にそへばいとしく。

この歌から私は秀れた静物畫から受けるやうな静かないとしさを

教へられた。切ない心持をちつと抱いて秋の野道をたどる男の感傷を説明しないで、「たどる短靴」としたところに、作者が自分を憐みいとしむ心持が、つかずはなれずいかにも果敢なげに歌つてある。佗しい一個の短靴がある人に逢ひにゆくとしても、泪の出るやうな眞實さを感じる。

小春日の朝の床に、塗枕とく、り枕とを見出したとき、この小さい静物のよりそへる様こそ、大天地にたゞ二人の眞實そのものと言つても好い。

許世子よ。生きて互にさしてゆく

道が違へば打擲もする。

泣くものをして泣かしめよ、泣くものを

して泣かしめよ、わが路のうへ。

自分の世界に生のまゝ没してゆくこの作者も、常に周圍にその本能的な愛のきづなを感じないわけにはゆかない。自分の道を深くおしつめてゆけばゆくほど周圍のものや、人間の生活がいとしく、憐まれて來るのである。吾々の路の上には、どんなにあつてもまだ足

りないほどに強い力を要する。

明日もまた洋服をきて出てゆくか、

ボタンのやうに心をどちて。

錢のない月のみそかにうつむいて

路ゆく時もきみをおもつた。

ボタンの下に心をどちて「つとめ」に出でゆく心持にこの作者のまことに得がたい純真なものを見る。我々が生活の路上に行逢ふ人はいつの頃よりかほんこのことを言はなくなつた。めい／＼に自

分の術で自分の所有になるものをより多く得るために、實にうそをいふ。なんのために得ようとするのかその目的は長い世紀の間に忘れられて、多く持てるものは失ふまいとし、持たぬものは奪はうとする。智慧をも、財をも、愛をも、夢をも。

多く持つものが必ずしも幸福でなく、少く持てるものが必ずしも不幸でないことを知つたものは、實にさびしく、あさましい。心を閉ぢてちつと見てゐるよりすべはない。けれど我々のまへには腥い血の池の彼方に、新しい世紀が来ようとしてゐる。心の友よ。我々

はもう、心を閉ぢて立すくんでゐる時ではない。
 送つて頂いた煙草がなくなる頃には私も山を出るでしょう。金澤
 で私の知つた人達へよろしく。

(湯涌、十月五日)

序 言

朝風詩歌集第一篇目次

(半生の餓と戀の上巻)

北 國 流 浪	大正四年春——同六年中	一
三 十 の 戀	大正五年夏——同六年春	二
ある男のなげき	大正五年 初 夏	五三
ある男のなげき前曲	大 正 四 年 春	五九
をばりの首都生活	大正三年初秋——同四年春	六二
残した妻子へおくる消息	大 正 三 年 七 月	八二
う き 世	大 正 三 年 五、六月	九〇
死んだ白雨君に	大 正 三 年 六 月	九六
續 餘 情	大 正 三 年 春	一〇二

跋「山より」

竹久夢二氏

大正七年四月十五日印刷
大正七年四月廿日發行

定價參拾八錢

石川縣金澤市千日町百五十二番地
著作及發行者 西 出 一
石川縣金澤市千日町一五二純正詩社內
編輯者 朝風詩歌集刊行會
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷者 澤 田 助 太 郎
石川縣金澤市高岡町九十番地
印刷所 明治印刷株式會社
石川縣金澤市千日町百五十二番地
發行所 純 正 詩 社

朝風詩歌集刊行會趣意

私達氏に最も親しい者相謀り、今郷國加賀の一新聞社に職を奉ずると共に、雪猶ほ深い白山の麓に、思想、藝術方面に於ける獨自の途を心靜かに歩みつゝある私達の詩人西出朝風氏が、過去十餘年間の製作に係る詩歌集の刊行を企てました。

氏が其若い半生を費して成した詩歌の事業が、日本文藝史上に如何なる位置を占む可きか、夫れは私達親しい者の言葉で假定するよ

りも、反つて私達が世の批判を聴かうとする者であります。刊行の
趣意の一半は茲に存します。

ただ回想的に氏の詩歌事業の外面に就て二三を記しますれば

一、(俳句方面)氏が最短の詩形俳句を試みたのは比較的遅かつたが、其主張は出發
に於て已に極めて自由で、總て當時の因襲であつた「俳趣味」「唯叙景」「唯客觀」
「季題趣味」「題詠」等を排した文章を公表する間に新興俳句分野の大部分を占め
た觀ある日本派に所謂新傾向派を生じ、新傾向派に更に分派を生じ、一步一步氏
の主張の蹤を従ひました。然し其最善な者を批評して氏は猶ほ「大體善良な方面
へ進んだが、詩の根本要素である音樂に全然無自覺だ」と言つてゐます。これは

俳句を純正詩(律語詩)にしようとする氏に於て當然の事であります。

一、(短歌方面)短歌に於て十七八年前の試作に緒を發し用語革命(現代語使用)を絶
叫して來た事は最も世に知られた事實で、最近數年は一般をして氏を専門歌人の
やうに思はしめた程、此詩形の製作に傾倒しました。尙ほ氏は用語革命と共に俳
句同様短歌の純正を擁護して、彼の「破調」等を極力否定しましたが、「破調」が瞬
時で姿を隠し、用語亦日を追うて氏の主張に進んで來た事も事實です。氏は前者
に就て言つてをります「内容と表現とが不離一體の者であるとしたら、用語革命
は普通に信ぜられる以上に重大な意味がなければならぬ」と。

一、(長詩方面)長詩では氏が生粹の現代語新詩(俗語體等でない)を試作して間もな
く、彼の口語詩運動が起り、前後して詩壇一般散文風に趨つて、兎もすれば詩體

朝風詩歌集刊行會規定

一、詩歌集は叢書として毎月一冊宛、若干月（六箇月以内）に互り刊行します。

二、每冊新裁四六判百二十三十頁内外、弘い愛讀を希望する趣旨に於て體裁の虚飾を避け、印刷、製本費等の低廉を期します。（一冊發賣定價參拾八錢）

三、會員はA、B二種とし

A會員會費

月額

參拾五錢

B會員會費

月額

五拾錢以上

B會員は特に刊行會の事業を援助する者です。

四、A會員には毎月叢書一冊を配付し、B會員には記念の爲め同上

番號記入、朝風氏自筆署名、特別（非賣品）一冊を配付します。

五、賛同者は入會と同時に會費二箇月分を拂込み、以後冊子受領毎に翌月分會費を拂込み、最初拂込の内一箇月分を最後の會費とします。

會費は冊子到着を以て領收の證としますが、別に領收證入用の方は往復葉書又は返信用郵券添送を願ひます。

六、入會申込所 純正詩社内朝風詩歌集刊行會

（附記）本篇著次第次月分の會費を御拂込み下さい。新入會諸君は

第二篇以下所要會費二箇月分、第一篇以來所要會費三箇月分。

279
452

(第二篇) 朝風幼時肖像挿入

歌集 半生の戀と餓 卷下 五月一日發行

内容 幕 洲崎の埋立地に立つて
きづな 續少年の歌 少年の歌
海岸町の二年 少年の歌
容 其ののちの歌 其のころの歌 餘情

(第三篇) 詳細第二篇に發表

詩集 句集

終

